

## 54 統計と医学的な事実

— 高木兼寛及び脚氣論

ベイ<sup>1)</sup> アレキサンダー・花輪壽彦<sup>2)</sup>

科学社会学の「構成主義」(constructivism)の立場から海軍軍医の高木兼寛の脚氣病対策(すなわち食料改革)について論及する。私が本発表で強調したい事は、明治中期に高木兼寛が発行した脚氣対策結果と論説(「脚氣病予防説」『大日本私立衛生会雑誌』一二号、一八八六年三月二八日)の中で、脚氣発生統計学を引用し、海軍の中で発生した脚氣の原因は蛋白質不足から起こる病氣だという医学的事実(つまりファクト)を証明した点である。しかし、これは高木が脚氣病の原因というファクトを発見したという事ではなく、脚氣は栄養不足に由来する病氣である事実を構成したという事である。科学的及び医学的なファクトとは、発見される前にすでに存在していたものではなく、予め定められたものではない。科学的

及び医学的な理論から事実への発達、つまりファクトの出現は、歴史的及び社会的なメカニズムを通して構成されていくものである。この批評的な論点から高木の医学について考察したい。

高木のファクトの構成過程は複雑で、高木の理論や実験結果が直接事実として確立されてきたというプロセスではなかった。一般に、実験室における現象及び実験結果が科学的なファクトになる前に、科学の共同体の意見(community)の一致、すなわち公認が必要になる。しかし、高木の場合はこれと違い、当時の科学及び医学共同体の公認を得る事が出来なかった。よく知られている通り、脚氣病の原因について、科学及び医学共同体の合意はまだなく、大きな意見対立があった。高木は脚氣論争の混乱を背景にどのように医学的なファクトを構成したのであろうか。

まず、高木は海軍省の権力を通して医学的なファクトを構成した。重要な点は、高木が脚氣対策理論を出していても、海軍省が彼の食料改革を規則として制度化しなかった時点では、高木の脚氣理論がファクトとして確立

しなかつた点である。高木の脚気対策理論が一八八四年に制度化されたことにより、蛋白質不足が病因であるという事実が明らかになった。つまり、高木の医学は、ファクトとしての権力と価値が海軍省という支持母体に依存していたという事を示す。

高木の食料改革の前に、多数の水兵が脚気で死亡してゆく原因は不明であつた。しかし、食料改革の後、脚気で死亡する水兵はいなくなり、病因が明白にされ、脚気予防に有効な対策が実施された。それゆえここでは、高木がファクトを構成した方法と彼支持母体の存在を分離する事が出来ない。つまり、高木が脚気病の治療法を発見した結果、海軍省が高木の医療を実行したという事ではなく、むしろ、高木の発見はそれが制度化された過程と一致しているという事である。更に、表に示している通り、高木の食料改革が一八八四年に制度化されてから、脚気患者は減少を示し、食料と病気の因果関係を証明している。統計が脚気の撲滅を証明してから、高木は脚気の原因が蛋白質不足である事をいえるようになった。海軍の兵卒から脚気を撲滅したからこそ、高木の医

学はファクトになった。

この構成主義の考え方は、科学史及び医学史研究ではどの様に参考になるであろうか。特に、科学的なファクトの出現過程では、統計はどの様な役割を果たすであろうか。表の統計は、高木のファクトの結果及び帰結を反映する数ではなく、むしろファクトの原因である。統計が脚気患者率の激減を示したのは、制度化以後のことである。すなわち統計が高木の理論を強固にしてから、大日本私立衛生会でも脚気は蛋白質不足による病気だと証明する事が出来るようになったのである。高木の科学理論は、統計と海軍省という支持母体を通して、真にファクトの価値観を獲得したと考えるのが妥当である。

(スタンフォード大学歴史部・北里研究所東洋医学  
総合研究所)